



第3回 写真コンクール 参加作品「霧の高原を往く」

技術部 測量課 佐々木 雅一

### 霧の高原を往く

海拔 1,500 m 東北のこの調査地は天候不順に毎日悩まされた。出かけは かりりと晴れていた空も現地へつき 仕事に取りかかる段になると 高山特有のガスが さあつとかかり 時には1m 先も見えなくなってしまう。

このような状態では 測量を行うにも地形の見通しが利かず とくに平板を使用する場合の地形測量においては 生命となる原図紙が湿つて成果に悪影響をおよぼす。

また逆に 朝から雨で外業をあきらめ 宿舎で整理・計算を始めると 昼近くなつてから勿体ない位晴れ上つてくやしがることも 調査員たれしもが経験することである。

調査期日も終りに近くなると 天候に妨げられて 遅れ勝ちの調査

に 霧は勿論 少し位の雨でも 現場へ向い強行調査を実施する。 雨具に身を固め 晴れることを念じつつ 測量班 今日も霧の高原を往く。

## 地質部 工業用水課



水調査部門  
として  
工業用水課の新設

昭和26年から地質部では応用地質課第3調査研究室を基幹として 所内各課協力のグループ組織で 全国重要工業地帯あるいは計画工業地帯を対象とする水の調査を継続的に行ってきた。

たまたま工業用水の問題が全国的な問題となり 種々の点から調査の機能と規模を拡大・充実させる必要にせまられてきた上 工業用水法施行上の技術面を推進する必要などから 所内外の協力を得て32年11月4日付 地質部に 工業用水課 の新設をみるに至つた。

同課は 従来の調査グループのスタッフを吸収 総員16名。 水理・水量 水温・水質・保全対策など多くの方面にわたる業務が 今後は同課の下でとりまとめられることとなり ここに多年けん案であつた地質調査所初の 水調査部門が発足したのである。

工業用水課は 水理地質調査を主とする第1調査研究室 河川の流量変化 水文観測などを専門とする第2調査研究室 水質・水温などの問題を取り扱う第3調査研究室 および井戸管理の技術相談 全国工場用水源台帳の管理を行う技術指導係と 都合3室1係より構成され 地質調査所 溝ノ口本所の4階に開設されている。

水の問題は日本では とかく あとあとにされ勝ちであるが 今後の工業立地にはますます用水の問題がむつかしくなり それだけ水理地質学的〜水文学的に高度の調査・研究が必要となる。 したがつて 従来グループ組織で行つていた水地域調査を 速やかに全国的に行つると同時に 各地の工業地帯の水保全対策あるいは 個々の用水型工場の井戸管理（井戸の汲み揚げ量をその地質に見合つて適度に加減して使うように管理すること）などに 長期継続的な調査研究の眼を注ぐことが必要と思われるので 工業用水課は とくにこうした方面に業務の拡充をはかる予定である。 大方の御協力と御支援とを願う次第である。 (地質部)

### ○ 高島 鉦 長 インドの鉄鉱石調査に出発



高島 鉦石 課長

地質調査所鉦床部 高島鉦石課長は インド鉄鉱石調査団(海外製鉄原料委員会)に加わり 旧臘21日東京羽田発空路カルカッタへ向け出発した。 一行は本部班 鉦山班・鉄道班・港湾班の4班に分れ インドのルーラケラ・スキング・マドラス・インド南西部などに分布する鉄鉱石の調査と輸送関係を調査し 本年2月5日帰国の予定である。

### ○ 砂川 一郎 技官 ロンドン大学へ留学

技術部地球化学課砂川一郎技官は イギリス ロンドン大学で鉱物学研究 (主として金属鉦床に関連する結晶の研究)のため 去る1月1日出発した。